

もう絶対に彼に触れてはいけない。彼が私に対して抱いている妄想が、あまりにも破廉恥で、淫らで、過激だなんて知ってしまったから、私の心臓が持たない。そう固く誓って、私は瀬名くんから徹底的に距離を置いた。用もないのに給湯室に逃げ、コピー機の前で忙しいフリをして、彼の気配を感じるたびに逃げ回った。しかし、エレベーターホールで、逃げ場のない罠が待っていた。急ぐ社員たちに押し込まれ、超満員の箱の中で、私は一番奥の壁際に追い詰められ、瀬名くんと密着する形になってしまった。

ガタン、とエレベーターが下降を始めた瞬間、私の背中とお尻が、彼の広い胸板とスーツ越しにもわかる逞しい太ももに、ぴったりと押し付けられた。触れてしまった。遮断したはずの声が、再び私の脳内に直接流

れ込んでくる——！

《……は？ マジかよ。こいつの背中、こんなに柔らかくて熱いのかよ。くそ、たまんねえ……。今すぐ後ろから抱きしめて、腰掴んで、チンポをぐりぐり押し付けてやりてえ。スカートなんか捲り上げて、パンツずらして、そのまま奥までぶち込みてえわ》

低く荒々しい声が、熱波のように脳内を埋め尽くす。

実際の瀬名くんは、私の後ろでスマホを冷ややかに見つめ、無表情を保っているのに、頭の中は完全に暴走していた。

《あゝめちゃくちゃいいニオイする最高。このニオイ思い出して夜オカズにしよゝ はあゝ てか、お前、さっき他部署の男と笑って話してただろ？ あの野郎の指が、お前の肩に触れてんじゃねえだろうな。……

殺すぞ。俺以外の男に笑顔見せるんじゃない。お前は俺のものだ。俺だけのものだよ……。この柔らかいケツ、俺の両手で鷲掴みにして、壁に押し付けて、後ろから何度も突き上げて、泣き叫ぶまで犯してやりてえはあ……。想像しただけで勃起が止まらねえ。毎晩、お前を俺のベッドに縛り付けて、瀬名くん、もう無理……。あんっ、壊れちゃうって腰を震わせてイキ狂う顔を、妄想してシコシコ抜いてるなんて、絶対に言えねえよな。クソ、可愛すぎる。腰のラインがエロすぎるんだよ。お前を全裸にして、俺の齒型とキスマークを全身に刻み込んで、俺の精液でぐちゃぐちゃに汚して、子宮の奥まで注ぎ込んで孕ませて……。》

「っ……。ひあ……。」

あまりに生々しい妄想の連鎖に、変な吐息が漏れそうになり、私は慌て

て口を両手で塞いだ。顔が熱い。足が震える。瀬名くんは相変わらず冷たい横顔でスマホを操作している。しかし脳内は止まらない。

《このままエレベーター止めて、全員蹴り出して、お前を床に這わせて、バックから思いっきり犯したい。喉奥までチンポ突っ込んで、涙目で啜えさせて、精液ぶっかけて、もっと俺のを欲しがる顔が見てえ……。愛おしすぎて狂いそう。お前が頑張ってる姿も、逃げ回ってる姿も、全部俺のチンポを疼かせる。お前を押し倒して、朝まで中出ししまくって、俺の匂いで染め上げて、二度と他の男なんか見られない身体にしてやる》

私はただ唇を噛み締めて耐えるしかなかった。永遠のように長い一階までの時間、私はただ背後から響く彼の本音に身体を熱くされ続けていた。